

龍馬アンローデッド

—伊呂波丸事件異聞—

帯刀古禄



## 目次

- 序章 — 明けない海 —  
第一章 *Hard a Port* — 取り舵一杯 —  
第二章 才谷梅太郎  
第三章 紅茶と御庭番  
第四章 決戦・長崎談判  
第五章 龍と柳  
終章 *Mid Ships* — 舵中央 —  
あとがき・謝辞  
解説

著者プロフィール

CS Publishing (電子書籍出版) の刊行にあたって



序 章 — 明けない海 —

何度も繰り返して見る、同じ夢がある。

それは忘れたころ不意にやってくる発作にも似て、夢だと分かっているのに、目覚めた後もしばらくは起き上がれないほどの憔悴をもたらすのだ。

私は船に乗っている。もはや浮かんでいることすら奇跡のような阿鼻叫喚の暴風雨の中、なす術もなく舷側にしがみつこうとするばかりだ。黒くのたうつ海面からは幾重もの巨大な三角波が灰色の牙となってそそり立ち、あまりにもちっぽけな私の船を、咬み裂くために踊り狂う。

—— 舵を、舵をとらなくては——。

船先をあの方角に向けなくては——。だが舵輪ははるか遠く、マストもとうに根元から折れ、蒸気機関もすでに浸水して沈黙している。そう、この船はただもう浮いているというだけで、その運命は完全にこの海の掌中で弄ばれているのだ。

だが、私には分かっている。あと、もう少しで嵐がやむのだ。

あと、もう少しで長い長いこの夜が明けるのだ。

それなのに、光へ向けて漕ぎ出すためのオール一本すら今の私は持ち合わせてい

ない。ひたすらに、この船から振り落とされないことだけを願って船縁にすがりつくことしかできないのだ。

すぐ近くで紫電が空と海を貫いた。数瞬の間、世界が真っ白に照らし出されるような閃光に目が眩む。続けざまにもう一つ、雷光が炸裂する。

その時、一人の男が舳先に仁王立ちしていることに気が付くのだ。

その男は縮れた長い髪を後ろで束ね、長身をすつくと伸ばして腕を組み、明けることのない闇の先をじつと見つめている。

私は、それが誰だか知っているのだ。

——やめろ、死ぬ気なのか——。

そう叫ぶ声は、嵐に掻き消されて届くはずもない。だが私は、なおも声を限りに呼びかけ続ける。この男を往かせてはならない。この船に留めて、共に夜明けを迎えなくてはならない。だが、荒れ狂う海は容赦なく船を苛み、その男に向けて手を差し伸べることにすら許そうとはしてくれなかった。

不意に、男が前方を指し示した。私は必死に船縁にしがみつきながらも、思わずその方向に視線を走らせる。闇の向こう側に、微かに淡い靄のようなものが漂っている。

——夜が明ける——。

そう言っているのか。もう一度男に目をやると、うつすらと微笑むかのように穏やかな顔をこちらに振り向け、はるか前方のかそけき光を指差し続けている。

待ってくれ……！　まだ、まだ往かないでくれ……！

声にならない声でその男の名を叫ぼうとした瞬間、ふいにすべての雨風がびたりと動きを止めた。

永遠のように長い夜が、いままさに明けようとしていた。

## 第一章 Hard a Port — 取り舵一杯 —

いつの間にか港へと足が向くのは、ほとんど習性のようなものかもしれない。

自分でもなけば呆れる思いで、高柳楠之助は波止場の陽光に眼を細めた。

明治の世を迎え、「致知（むねとも）」といういかめしい名に改めてはいるが、やはり慣れ親しんだ「楠之助（くすのすけ）」のほうが座りがいい。

陸軍兵学寮・少教授——。

これがいまの楠之助がもつ肩書きだ。新しい名前と同様にいかめしく、それでいてどこか自分のことのようにには思い切れない、なんとも落ち着かない役職ではある。仕事としては陸軍の若い下士官を中心に、数学と測量術を教授するのだ。

入港している大きささまざま、国籍もさまざまな船の数々を眺めながら、心ははるか海上を白波立ててひた走る、船の舳先にでもあるかのような錯覚を覚える。

そう、自分は骨の髄まで「船乗り」なのだ。楠之助は心からそう思う。

洋式航海測量の専門家としては、おそらく楠之助が日本におけるパイオニアであると言えるだろう。

楠之助は紀伊田辺藩に生を受けた。徳川御三家の一角である紀州藩には、田辺藩と新宮藩の主自らが「附家老（つけがろう）」として藩主の補佐役を務める伝統があった。幕政の世では楠之助はこの田辺藩・安藤氏の家臣であり、紀州徳川家の陪臣という立場であった。

しかし彼は、かのシーボルト直門として名高い蘭学者・伊藤玄朴の門弟として、その私塾「象先堂」で頭角をあらわし、やがて塾頭を務めた。同じ門下には日本初の洋式城郭である、函館五稜郭を設計した武田斐三郎がおり、楠之助は航海測量を専門としていた。

さらには函館にて航海・操船術を習得し、並行して英語などの語学にも造詣を深めていった。

当時の紀州藩に関わる人材としては、エリートと言って差し支えないだろう。そして、楠之助は紀伊海軍の蒸気艦、「明光丸」の艦長として任命される。

明光丸――。

その船の名を思い出すたび、楠之助は複雑な感慨とともに、まさしく怒濤のごとく駆け抜けた「幕末」という不可思議な時代の記憶にしばし浸ってしまうのだ。

そう、あの時の船出こそがすべての始まりにして、そして終わりへと向かう航海

となったのだった——。

慶応三年（一八六七）四月二三日午前七時、紀伊・塩津の浦を出港した明光丸は、一路長崎へと針路をとっていた。

蒸気艦といっても、よく知られたペリー提督の黒船のような外輪船ではない。今日の船舶とよく似たスクリュー式の推進装置を備えており、従来の帆船とは桁違いの船足の速さと強さを兼ね備えている。

明光丸は機関出力も安定し、風向・潮目ともに何の問題もない。快適な航海の滑りだしに、艦長である楠之助は顔にこそ出さないものの、どうしようもなく心が浮き立つのを抑えきれずにいた。

「スター・ボード・テン！」

高らかに号令をかけると、

「スター・ボード・テン、サー！」

と、よく通る声で操舵手からのアンサーバックがブリッジに響き渡り、明光丸はあやまたず十度の角度で右方向へと舳先を向けていく。

「ポート・ファイブ！」

「ナツシング・スター・ボード！」

「ステディ・アズ・シー・ゴーズ！」

楠之助は艦の運動性とクルーの反応を確かめるように、次々と操舵号令を繰り出した。その都度、語尾に「サー」の付く威勢のよいアンサーバックがあり、明光丸は忠実にその舵輪の動きに応えるのだった。

人の好い艦長はすっかり嬉しくなってしまう、満面の笑みでクルーを称えた。

「お見事！ これで英語圏の船に乗り組んでも大丈夫だね？」

そう言われた操舵手は間髪入れず、

「アイ・サー！」

と応答してみせ、皆の笑いを誘った。

「なあ、キャップよ」

手元の帳面をめくりながら、ぎよろりと楠之助に目を向けたのは艦長次席の岡本寛十郎だ。別に機嫌が悪いわけではないが、無愛想でいつも怒ったような顔に見えることから、クルー達からは少し怖がられている。

「えーっと、〈すたーボード〉が〈卯の舵〉で、〈ぼーと〉が〈酉の舵〉でよかったですやっけ？ ほんでから、なっ、なっしんぐ……なんやっただけ？」

「スター・ボードとかポートとか」

「ああ、それ。意味、何てよ？」

「そうするな、ってこと」

「ほな、へなっしんぐ・すたーぼーど」なら（卯の舵に切るな）っちゅうこっちゃな？」

ただでさえ怒ったように見える顔をさらに難しくしながら、覚十郎は帳面に英語での操舵号令とその対訳を書き付けていく。「卯の舵」とは後に言う「面舵」で「右転舵」を意味し、「酉の舵」はその逆方向で「取り舵」のことだ。二人のやり取りにクルーたちも忍び笑いをもらしている。

覚十郎の正式な職名は「一等器械方」、つまりは複雑な機構を持つ蒸気船のメンテナンスを行う「機関長」といっていいだろう。また、艦長である楠之助に次ぐ指揮命令権を有していることから、明光丸にとっては事実上の「副長」でもあるのだ。

明光丸はこれまでに江戸・長崎はおろか、上海・香港などの海外へも航海した経験を有している。また、医官の成瀬国助、御舟手方の福田熊楠、勘定奉行支配小普請の岡崎圭助と中谷秀助らが乗り組んでおり、そして運転方として讃岐の塩飽島出身の長尾元右衛門が選ばれている。長尾は元・勝海舟の門下生として幕府海軍の教

育を受けており、特別に七人扶持の待遇でスカウトされた有名な乗り手だ。さらに、クルーの一員である乗組員の尾崎十兵衛は海難事故でアメリカに漂着した経験を有しており、英語を解し海外の船務についても明るかった。

このように、明光丸には個性的かつ優秀なクルーが揃っていた。

幕末の海軍は、洋式操船といえば主にオランダから招いた教官のもとで訓練を行うのが普通だった。だが楠之助は、今後世界の海で標準になるのは英語だと予測している。それもあって、操舵号令をあえて英語で行うという訓練を組み込んでいるのだ。

ちなみに、現代においても海上自衛隊以外の商船などでは英語を中心に日本語を混ぜた、独特の操舵号令を使用するのが一般的だ。

「あとはなんや、すてでー・あず…、あず…」

「ステディ・アズ・シー・ゴーズ。その時点での針路で真っ直ぐ。つまり〈宜う候〉だね」

「ほなもう、宜う候（ようそろ）でよろしいやん」

悪態をつきつつも覚十郎は熱心に帳面へと記録している。何だかんだといいつつも、英語を重要視する楠之助の考えには理解を示しているのだ。

「せやけどキャップよ、(あい・さー)っていう返事だけはいただけんなあ……。なんとこのう、間延びしとらしてよ」

「そうかなあ。(承って候) くらいいの丁寧な言い回しなだけどなあ」

和気藹々とした艦内の雰囲気ではあるが、むろん彼らは物見遊山に出かけたわけではない。このときの航海で、明光丸は重大な任務を帯びていたのだ。

当時の幕府は急速に海軍力の増強を図っており、最新の蒸気艦の導入を進めていた。そんな潮流の中、元治元年(一八六四)の第一次長州征討の折に、紀伊藩命によって長崎で購入されたのが明光丸だった。

全長四十一間(約七十五メートル)、船幅五間(約九メートル)、深さ三間半(約六・四メートル)、機関出力百五十馬力といったスペックを有し、イギリスの造船所にて進水している。元の名を「バハマ号」といい、紀州海軍初の蒸気艦として就役したのだ。

ちなみに幕府海軍の旗艦であるオランダ製シップ級フリゲート、「開陽丸」は全長約七十三メートル、船幅約十三メートルと記録されており、明光丸はこれに近いサイズの大型艦であったことがよく分かる。もともと開陽丸の蒸気機関は千五百馬力と、桁違いの出力ではあったのだが。